



神奈川県

荒川政幸さん・淳子さん・アキエさん(請戸)

取材者：特定非営利活動法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：6月24日

やれることをやりたい、やらなくては



▲荒川政幸さん、淳子さんご夫婦



▲雑貨店「GREEN GRAIN」

いわき市で雑貨店を営んでいた荒川さんご夫婦。
今年4月に、神奈川県秦野市で雑貨店「GREEN GRAIN」
をオープン、新たな一歩を踏み出しました。

■政幸さんの話
震災当時、私たちは、いわき市で雑貨店を営み、請戸の家から毎日通っていました。震災はオープンして1年半ほど経ち、顧客も増えてきた頃でした。地震や津波が起きた時に、私たち夫婦はいわき市の店舗にいました。母はバス旅行。父だけが自宅にいました。父はすぐに車で避難、機転をきかせ混雑する道路の反対車線を走り、難を逃れることができました。私たち夫婦も自宅に帰ろうと午後4時にいわき市の店を出たのですが、渋滞のため、浪江町高瀬の「いこいの村」で父たちと合流できた時には午後11時を過ぎていました。翌朝、津島に緊急避難。更に東京都大田区の妹の家へと避難しました。その後、私たちは妻の実家のある神奈川県秦野市のア

パート、父母は福島市の仮設住宅でそれぞれの二重生活が始まりました。震災から4年。どこでの暮らしを選ぶか迷う日々でしたが、アパート近くに店舗にできる売り物件を見つけ、今年4月に、雑貨店「GREEN GRAIN」をオープンしました。大正13年にできた建物ですが、リフォームし家周りを整え、店舗兼住宅にしました。妻の作るステンドグラスの小物とあわせ雑貨品を仕入れて販売、お陰さまでお客さまも増えてきています。
請戸の家には、夫婦のこだわりがいっぱい詰まっています。津波で、築9年の家は床板を残すだけで跡形もありませんでした。一昨年初、父はガンで亡くなりました。母は、福島県の仮設住宅で一人暮らしをしていたのですが、昨年夏、脳こうそくで倒れ入院、車いすでの生活。今は車で10分ほどの秦野市の介護老人保健施設に入居しています。「震災がなかったら」という思いにはなりますが、「やれることをやりたい、やらなくては」と気持ちを切り替えるようにしています。
■アキエさんの話
私は、給食のおばさんをやっていたので、食事作りが得意。仮設住宅に入居していた時には、おかずをたくさん作って、近所の人に配ったりしていました。仮設住宅では、震災前と同じように、お



▲アキエさんが活かしたフラワーアレンジメントとっしょに

しゃべりを楽しみました。ここ（介護老人保健施設の入居者は全国あちこちから集まっているので、ふるさとの話ができません。食事に、外国産の名前もわからない魚が出てくると、請戸の魚の美味しさが思い出されます。
フラワーアレンジメント作りや「お出かけ」もありますが、一番の楽しみは、民謡歌手大泉逸郎の歌を聴くこと。浪江のことが思い出され涙が出てしまいます。
■淳子さんの話
浪江に戻るたび、参加していたラベンダークラブで植えた6号線沿いのラベンダーを見ると、手入れをしたくなります。また、保健協力委員をさせていただいたお陰で、いろいろな人に出会い、お世話になりました。浪江には9年間しか暮らせませんでした。楽しい思い出がたくさんあります。自宅付近から見つけ出した食器のかけらを現在の家の駐車場で利用、時々眺めています。

浪江のころ通信

・第50号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のころ通信」が編集・発行されます。

浪江のころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のころ通信」第50号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





▲みなさんのお話しはいつまでも尽きませんでした。
ここには、いつもこんな風に穏やかな時間が流れているのでしょう。

宇佐美 近所に土地を求めると「京月窯」が近くにあることを知りませんでした。また、知り合いが数軒あることも分かりましたので、見知らぬ土地ですが何とか慣れ親しんでいきたいと思っています。

若松 私は長い間JAに勤めていましたが、震災後は働き過ぎて疲れてしまったようで、今年3月で早期退職をしました。ですから、京月窯ができた頃は夜に遊びに来ていました。今は、東京で仕事をする娘に会ったり大好きなサッカーチームである浦和レッズの応援に行ったり、週に1回習うフラダンスを楽しんでいます。実はダイエツトのためにフラを始めたのですが、その奥深さや身体の使用の方にハマっています。

◆みなさんにとって「京月窯」はどのようなところですか。また日頃どんなことをして楽しんでいますか

難されている方々が気軽にお茶を飲みに来られる場所でありたいと思いますし、殊に仮設住宅に暮らす方々はお家が狭いことから、気晴らしになればと願っています。

近藤 ふるさとの浪江を忘れることはありません。心の宝として大切に思いながら、これからは今の暮らしを大事にしたいです。

豊口 「ふるさととは遠きにありて思うもの」と言いますが、まさに、いつも心の中にあります。浪江に対する思いや、みなさんにとってふるさととはどんなものなのかをお聞かせください

◆浪江に対する思いや、みなさんにとってふるさととはどんなものなのかをお聞かせください

私の趣味は音楽鑑賞と鉄道模型づくり、カメラなどです。鉄道模型は暫くお預けですが、今度の家には浪江の家と同じようにオーディオルームを造りました。

若松 ふるさと浪江は思い出です。今こうして福島市に住んでいることは夢をみているようですが、災害から5年経っても浪江には安心して住めないと思うので、もう戻れないと思っています。

若松 浪江のグルメもよく思い出します。高野菓子舗のパンや「鯉のこも和え」、「かすべの煮付け」など今となっては思い出になっしまいました。

若松 「ほっき貝の刺身」や「鰹のアラ汁」。浪江でしか食べられない美味しいものを思い出しますね。

若松 浪江に未練はありませんが、原発の状況を見る限り帰れないでしょう。年齢を考えると、これからの生活をどうするか決めるのは今だと思っています。すし、もういい加減、落ち着きたいのです。



近藤 京子さん(大堀)
宇佐美 勉さん(西台)
豊口 澄子さん(幾世橋)・若松世津子さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：6月16日

「京月窯」はいつまでも人をつなぐ“場”でありたい

今回の取材場所「京月窯」は、大堀焼の窯主、近藤京子さんのご自宅でもあります。2011年暮れ、避難していた福島市の郊外で「京月窯」を再興されました。その窯の火入れの日に夫の近藤公孝さんに取材させて頂き、ご一家の避難の様子などもお聞きした記事は、『浪江のこころ通信 第7号(広報なみえ平成24年1月号)』に掲載されました。その際、公孝さんは「窯元の間でもあっても、大堀にいた時と同じように、みなさんの憩いの場にしたい」とおっしゃっていました。妻であり、窯主の京子さんもまた、相双ビューローの取材に対して同じことをおっしゃっており、その所縁の場所で、浪江の方々のお話を聞くことができました。



近藤 京子さん 宇佐美 勉さん 豊口 澄子さん 若松世津子さん

若松 津島から友人を頼って福島市へ、そして東京に避難しました。猪苗代に二次避難した後、福島市内の借上げ住宅に住んでいます。避難した当初は夫の父、私の両親とも一緒に暮らしていましたが、今は別々に暮らしています。市内に造っている自宅には、私の父も一緒に住むことになっています。

若松 私と京子さんは同い年であり、お勤めを始めた独身の頃から長い付き合いです。また、豊口さんは私の娘の恩師であり、

宇佐美 ペットを連れ家族4人で津島の活性化センターから土湯温泉、川俣町の道の駅での車中泊や町内の体育館を経て、名古屋に避難しました。高齢だった両親との車中泊や体育館での日々は辛かったですね。その後、二次避難で猪苗代へ、そして福島市宮代の仮設住宅から現在の住まいです。今、京月窯から目と鼻の先に自宅を建てており、娘と一緒にまもなく引っ越しします。

◆まず、みなさんの東日本大震災・原発事故からの避難の様子と、この京月窯やご出席の方々とつながりなどをお聞かせください

若松 高年齢の両親に浪江に居た時と同じような環境で暮らして欲しいという願いと、窯主という仕事を早く再開したいという思いとで、この古民家に居を構え、窯を開くことを決めました。男性の窯主さんとは違った女性ならではの作品づくりを、やれるところまでやってみようという気持ちもありました。

近藤 「やすらぎ荘」から津島を経て、二本松市針道の避難所から一時は東京の親戚へと、私の両親ら家族全員で転々としました。

高年齢の両親に浪江に居た時と同じような環境で暮らして欲しいという願いと、窯主という仕事を早く再開したいという思いとで、この古民家に居を構え、窯を開くことを決めました。男性の窯主さんとは違った女性ならではの作品づくりを、やれるところまでやってみようという気持ちもありました。

豊口 夫と福島市笹谷東部の仮設住宅に住んでいます。娘たちは会津若松市に避難していましたが、今は福島市におられます。今、これからの住まいのことを考えている最中です。